

# ひだご坊

No.294

2014年1月20日

発行 真宗大谷派 高山教務所  
発行者 大町 慶華  
〒506-0857 高山市鉄砲町6番地  
☎(0577)32-0776  
\*毎月20日発行 50,000部  
三市一郡無料配布  
印刷 山都印刷株式会社

## 念じられ 照らされて

### 本願とは

藤原正寿



〔略歴〕  
一九六三年石川県生まれ。真宗大谷派親鸞仏教センター研究員、真宗大谷派教学研究所所員を経て、現在大谷大学准教授(真宗学)。

私たちは、自分の思い通りに生きたいと思い、それが可能な生き方こそが幸せな人生であると思っている。しかし実際のところ、どのように生きていくことが本当に幸せで、自由な生き方であるかをわかってはいないのではないだろうか。

先日ある医療関係者が書いた本にもしろい提案があった。それは、「辞世の句」を書いてみようという提案である。「露と落ち 露と消えにし 我が身かな なにはのことも夢のまた夢」  
(豊臣秀吉)  
「旅に病んで 夢は枯野をかけ廻る」  
(松尾芭蕉)

このような辞世を今のうちに書いてみようとい

うのである。この本は、どうやって健康で長生きするのか、その方法ばかりがもてはやされる現代社会に疑問を投げかける。いろいろな健康法が次々と紹介され、豆腐がいいとテレビで報道されるとみんなが豆腐に殺到し、食品売り場から豆腐が消えてしまうと、バナナがいいと言えばバナナが店頭から姿を消す。ありとあらゆる健康に良いとされる健康食品の宣伝が繰り返される。どこかおかしくないかと。死を遠ざけ、生を延ばすことの前に、きちんと死を見つめようではないか。私たちは、全員が間違えずに死を迎えるのであるから、自分の生き方を見つめ、どのように生きていくかを考え、そのうえで健康や、自由や、幸せを見つけていこうではないかとこの本には綴られる。そのための一つの手段として、辞世を書いてみよう。私の人生とは何か、何のために生まれてきたのか。そのことと向き合ってみようという一つの提言である。

無量寿経」という法蔵菩薩の本願である。目先の楽しみに逃げるのではなく、不安を除き安らぎを与えたい。そのためには、私たち一人ひとりの不安の原因が何であるかを知らせることが大切であるというのが、法蔵の願いである。私たちは、始終願いを起こしている。しかしその願いは、状況の中で起こす願いである。病気の時は病気を治ればと願い、受験の時は合格さえすればと願う。その願いが叶えば満足するのかもしれない、ちゃんと次の願いを起こしている。どこまで行っても終わりが無い。法蔵菩薩の本願とは、一言で言うと、私たちの不安の原因が、自分の置かれていた状況や環境、お金や健康などにあるという思い込みを破るはたらきである。私たちの不安の原因は外にあるのではなく、限りなく外に向かって要求し、願いを起こし続け、それに振り回されていることに気づいていない私たち自身の生き方にあるのだと教えるはたらきが、本願である。葬儀の場面において、たびたび故人の生前の功績をたたえる弔辞を耳にすることがある。私たちは、この娑婆を中心に物を見たり考えたりするために、死の意味が分から

### 飛驒の真宗

## 伝承散歩① 玄興寺狐

昔々、玄興寺の住職が火葬場へお経をあげに行かれたその帰り、茂みの中から小さな子狐を見つけました。親狐とはぐれたのだろうと、子狐を拾って帰り、寺で飼うことにしました。近所の人たちもみんなかわいがるので、人懐こい子狐になりました。ある日、高山別院の法被を着た使いの人が来ました。「今夜、ご輪番が近くへお参りにいらっしやいます。そのついでに子狐を見に立ち寄りたらいそが、よろしいか。」住職は了承し、お寺では輪番をお迎えする準備を整えました。夜も更けたところ、輪番がお供の者を連れていらっしやったので、座敷へお通ししました。輪番は子狐を見ると、抱き上げ、頬ずりして喜ばれました。輪番は子狐を膝の上のせて、ごちそうのあげを食べさせています。子狐もたいそう気が

分が良さそうです。そうこうしているうちに輪番が言いました。「ご住職、ちょっと相談したいことがあります。外に使いの者がおりますので、文書をとってきてもらえませんか。」住職は外へ出ましたが、誰もいません。誰もいないことを輪番に伝えようと戻りましたが、輪番もいません。お手洗いにいったかと思ふと障子に目をやると、大きな穴が開いていました。よく見ると、黄色い狐の毛がっついていました。「ありや、やられたわい。親狐が子狐を取り返しに来たんやわい。」住職はあきれ苦笑いをしてしまいましたとさ。



玄興寺(高山市)

ない。だから、生前の功績をたたえてこんな立派な方だったから、死んでも迷わないでしようと期待を込めているのではないだろうか。時には葬儀が、故人を利用して世俗の権威や欲望を助長する場になってしまっている場合もあるように思う。迷っているのは亡き人ではなく、娑婆の延長上に死後を見る事しかできない私たちのほうなのだ。教えるはたらきが法蔵菩薩の本願である。



東へ  
— 仏教伝来に思いをはせる —

### 新春のご挨拶

高山教務所長 大町 慶華  
高山別院輪番

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひ申し上げます。教区・別院の宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要については、二〇一五年の春に厳修する予定でありましたが、本堂屋根の御修復事業の内容が固まっていなかったため、いったん白紙に戻しました。本堂屋根の御修復事業の工事及び募財の期間が決定した後、改めて御

遠忌法要期日を決めたいと思います。特に今年には本堂屋根の御修復を具体的に決定いたしたく、皆様のご理解を賜りますようお願い申し上げます。今後、新たな課題をひとつずつ協議をしながらすすめてまいるとともに、教区・別院の御遠忌事業の円成のため、皆様のご協力をいただきたく、衷心よりお願い申し上げます。新年のご挨拶とさせていただきます。

☎テレホン法話(0577)3423133 ○1月21日~31日: 細川宗徳氏「運乗寺」 ○2月1日~10日: 岩佐幾代氏「浄永寺」 ○2月11日~20日: 三枝正尚氏「随縁寺」 宗教トラブル相談窓口(0577)13210763



私を照らす

ひかりの言葉 ①

酒井 義一

時の流れは早いもので、お正月から一か月が過ぎようとしています。ところでお正月は、いつもよりお酒を飲む機会が増えるものです。この時のためにとっておきのお酒をあげた方もおられたのではないのでしょうか。家族そろって一杯。おせちとともにまた一杯。新年を祝ってまた一杯。理由もつけずにもう一杯。こうしていつのまにか酔っぱらいの私が完成していきます。

人生一生 酒一升 あるかと思えば もう空か

作者不詳のこの言葉は、今までにお寺の掲示板に掲示した言葉の中でも、特に反響の大きかった言葉です。人間の一生と一升瓶をかけたこの言葉に、多くの人々が「本当ですね」「実にうまいことを言いますね」と感想を語っていかれました。きつと思いがたるところがあるのでしょうか。身に覚えがあるからなのでしょう。まだたくさんあると思っていた一升瓶のお酒が、いつの間にか空っぽになっていく。まさに言い当てられるようにしてうなずかざるを得ない事実です。 私が言い当てられるということ、は、とても大切なことです。教えの言葉もしばしば私のことを言い当ててくれます。自分ではまった

く気がつかなかった私のすがたを照らし出すのです。教えを聞くということは、私の事実を言い当ててくれる言葉と出会うということなのかもしれません。

時の流れは、ひとときもどまることがありません。人の一生もまたかくのごとし、です。一年はあつという間に過ぎていきます。誰もがまるで見ないかのようにしています。私たちがの生は確実に終わりに向かってつきすすんでいくのです。「あるかと思えばもう空か」ですから、まだまだ大丈夫と思っても、時間には限りがあるということなのです。そのことを先の言葉は言い当ててくれます。

だからこそ、本当に急がなければならぬことを、しっかりと見定めて急ぐのではないか。これもまた、先の言葉が語っているメッセージなのではないでしょうか。しかし、あわててはいけません。あわてて急ぐと、足もとにあるものにつまづいて、転んでしまうからです。また、まったく逆の方向に駆け出してしまってしまうこともあるかもしれません。

しっかりと見定めて、ということが大切なことです。私は本当に何を急ぐべきなのかを、人々に聞きながら、教えに尋ねながら、急ぐのです。あわてて急ぐのではなく、ゆっくりと急ぐのです。

こんな言葉もあります。

一日の空過は、 やがて、 一生の空過となる (金子大榮)

今日一日を空しく過ごすことは、やがて私の一生を空しく過ごすことに通じていくというのです。厳しい響きの言葉ですが、何ともいえない味わいのある言葉です。空しく過ぎることのない人生をどうか生ききつてほしい、そんなあなたを空しく感じます。のんきに一日を空しく過ごしている私に届けられる応援歌のようでもあります。

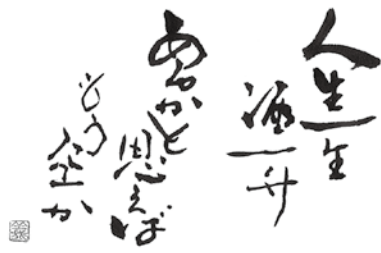
世の中には呼びかけが満ちています。その呼びかけは私の身の事実を言い当ててくれます。しかし、それだけではなく、同時に、だからこそやるべきことを急ぐ、空しく終わらない生を生きたいと促し続けているのではないのでしょうか。

大切にしたいことは、人に出会い、言葉に出会い、教えに出会いながら、急ぐべきことを急ぐ歩みをすすめていくことです。

私は今を大切に生きているのでしょうか？

まだ大丈夫と思いついて、気がつけば「もう空か」というようなことはないですか？

空過と呼ばれるような生き方をしていないでしょうか？



次回は藤場芳子さんの「女と男のナムアミダブツ①」です。

第32回 別院真宗公開講座 (全4回)

日時 2月12日(水) 午後2時~4時

講師 見義悦子氏 韋提希の「自絶瓔珞」に聞く

会場 高山別院 御坊会館

聴講費 600円

聖教学習会

日時 2月19日(水) 午後1時30分~午後4時30分

講師 安富信哉氏 (大谷大名誉教授) 『唯信鈔』講義

講題 『法然から親鸞へ』

会場 高山別院 二階研修室

会費 無料

御坊子ども会

日時 2月15日(土) 午前9時~11時

内容 すまいるファミリー(子育て支援ネットワーク)によるおたのしみイベント他、おつとめ、遊び、ゲームなど。

対象 小学生

会場 高山別院本堂

会費 無料

主催 高山一組

おしえておきなさん

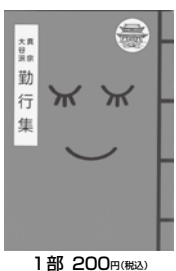
問 お東さんの焼香の正しい作法についておしえてください。

答 焼香は、仏教の儀式には欠くことのできない大切なことで、お釈迦さまご在世の当時から行われていたものです。香を焚くということは、その薫りにより、仏前を莊嚴すると共に、淨らかな光明の世界(浄土)を思い浮かべ知る縁となります。

- ①姿勢を正して、ご本尊を仰ぎ見ます。
②次に焼香をします。右手で香をつつまんで、香炉の中に二回入れられます。この時、つまんだ香を頭や額に落とさないように注意してください。

今月の一冊

『あかほんくん勤行集』 真宗大谷派青少年センター発行



「あかほんくん」がデザインされた表紙が特徴で、内容は正信偈(草四句目下)、念仏和讃ほか。和讃は句ごとに番号をつけ読み順番を表示するなど、わかりやすく編集されています。

お子さま、お孫さまと一緒に毎日のおつとめをしませんか。 お求めは教務所まで。

真宗本廟(東本願寺)収骨団体参拝 参加者募集

真宗本廟収骨とは、京都東本願寺の親鸞聖人の御真影が安置される御影堂にご遺骨をお収めすることです。

- 期間 3月15日(土)~16日(日)【1泊2日】
日程 お齋、真宗本廟法話、収骨、阿弥陀堂御修復現場視察、大谷祖廟参拝など
宿泊 アパホテル京都駅前
定員 30名 ※定員になり次第締め切り
参加費 お一人30,000円
締切 2月14日(金)

※収骨を行うには、相続講金を納めることにより発行される「収骨證」が必要です。ご希望の方は、お手次のお寺までお申し込みください。詳細については教務所へお問い合わせください。

- のあたりに持ち上げて、拝むことにはなりません。(もちろん食べたりもしません)
③香盒の香の乱れを直します。
④再びご本尊を仰ぎ見、合掌して自分の耳に聞こえる程度の声で「なむあみだぶつ」と称えます。
⑤合掌を解き、軽く頭を下げて一礼してから退きます。

一般家庭の仏間で法事が営まれるときは、香炉と香盒を盆にのせ、順番に回していく「回し焼香」が多いですが、この場合も作法は同様です。

ちなみに、日常お内仏にお参りをするときは、線香を焚きます(燃香)。灰に突き刺すのではなく、香炉に合わせて適宜に折り、横にねかせて置きます。そして注意すべきは、香炉は灰皿ではないということです。使い終わったマッチ棒などは入れないようにしましょう。